令和４年度秩父市オンライン連載

「秩父氏」をたどる　～その足跡そして現在へ～

秩父市教育委員会文化財保護課

第３回　秩父氏の系譜

１　畠山氏

①畠山氏とその館跡

畠山氏は、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて武蔵国で勢力を張った、秩父氏の一族です。秩父重弘の子である重能が男衾郡畠山郷（現深谷市畠山）に所領を得て、畠山姓を称したことに始まります。

畠山氏の館跡と伝承される遺跡が、荒川右岸、河岸段丘上の深谷市畠山に所在します。この遺跡では、発掘調査の結果、墓域や区画溝・堀が確認されており、遺物の年代からは１３～１５世紀の館と考えられています。

館跡の南西約１．５km には旧鎌倉街道上道が南北に走っており、この道は秩父と畠山、そして比企郡嵐山町大蔵をつなぐように整備された道であったとも想定されています。秩父は秩父氏発祥の地であり、秩父牧がありました。また、大蔵は秩父重隆が本拠を構えた地であり、重忠は大蔵を約１．５km 北上した菅谷にも居館したとされています。

当時の武蔵国では、秩父氏一族の中でも畠山氏・河越氏が台頭していました。畠山氏にとって、秩父氏一族の歴史上重要な地である秩父・大蔵の獲得は、河越氏と並び立つためにも重要なことであったと推測されています。

また、館跡の所在する畠山は、荒川南岸の渡河点にあり水運の便が良い場所でした。

このような陸上・水上交通の優れた地に館を築くことにより、畠山氏は様々な物資を獲得し、その勢力を拡大させていったとも考えられています。

②畠山重忠

畠山重忠は、秩父氏一族のなかで最も有名な武士の一人に挙げられます。ここでは、

『吾妻鏡』、『源平盛衰記』、『平家物語』等の史料研究により明らかになっている重忠の軌跡について、紹介していきます。

重忠は、長寛２（１１６４）年に、畠山重能の次男として生まれました。

治承４（１１８０）年、源頼朝が伊豆国で平氏打倒の旗揚げをすると、重忠は平氏方として源氏方の三浦氏の衣笠城を攻め落城させますが、その後、重忠を始めとする秩父氏一族は、頼朝に従うこととなります。それ以前の１５年間、重忠がどのように過ごしてきたかは史料に残っておらず、分かっていません。

その後、重忠は頼朝の厚い信頼のもと、治承・寿永の内乱、奥州合戦など様々な場面で活躍したことが伝わっています。

文治５（１１８９）年、頼朝が奥州平泉の藤原氏を討伐するため、大軍を率いて鎌倉を出陣します。このとき、頼朝が率いる大手軍の先陣を命じられたのは重忠でした。また、建久元（１１９０）年、頼朝が後白河法皇に拝謁するため上洛した際、先陣を命じられたのは重忠であり、重忠は在京中も頼朝の身辺警護にあたっていました。

このように、重忠は重要な場面で先陣に命じられており、頼朝から厚い信頼を得ていたことがうかがえます。しかし、頼朝の死後重忠は後ろ盾を失い、さらに北条氏内部の争いなども絡み窮地に陥り、元久２（１２０５）年に誅殺され、その生涯を終えることとなります。

参考文献

埼玉県立嵐山史跡の博物館他編 2012『秩父平氏の盛衰―畠山重忠と葛西清重―』

荒川村教育委員会他発行 1992『秩父・平家物語―平将門から畠山次郎重忠まで―』

２　河越氏・江戸氏などの諸将について

鎌倉幕府を支えた有力御家人として、畠山氏以外に河越氏・江戸氏・葛西氏・豊島氏などが挙げられます。この四氏は、すべて秩父氏の流れをくむ一族です。河越氏は、重綱の子・重隆がその始まりで、永暦元（１１６０）年に後白河法皇が新日吉神社を建立する際に、荘園として寄進した河越領の荘司を任され、河越氏と名乗ったとされます。源頼朝が治承４（１１８０）年８月に平氏打倒を掲げて立ち上がると、はじめ河越氏や畠山氏は平氏方として戦いますが、その１０月には源氏方として帰属しました。河越氏の中でも、河越重頼は武蔵国留守所総検校職として武蔵国の中小武士団をまとめる役割を任されていました。頼朝からの信頼も厚く、頼朝の長男・頼家の乳母として重頼の妻が召された他、重頼の娘が義経の妻として迎え入れられました。

江戸氏は、畠山氏や河越氏と同じく重綱からの分流になります。重隆の弟である重継が江戸氏を名乗り、江戸の地を本拠地として治めました。江戸氏は河越氏や畠山氏と同じよ

うにはじめは平氏方として戦い、のちに源氏方に帰属しました。しかしながら、『吾妻鏡』によると江戸氏の江戸重長（しげなが）は諸氏と異なり、源氏方へ下ることに強い抵抗を示し、頼朝がその懐柔にとても苦労したとの記載もあります。頼朝は重長を「汝己為棟梁（なんじおのがためのとうりょう）」と持ち上げていることからもその存在を高く評価していたと思われます。「棟梁」と言われた江戸重長ですが、その活躍を示す史料は少なく、没年齢も判明しておりません。

豊島氏・葛西氏は、秩父別当であった武基の弟である武常を祖として出てきました。それぞれは豊島郡（現在の東京都の城北および城西地域）・葛西郡（現在の東京都の城東地区）に勢力を有していました。武常を曾祖父に持つ清元（きよもと）は豊島氏を称し、その長男朝経（ともつね）は豊島氏を引き継ぎましたが、弟の清重（きよしげ）は葛西氏を名乗りました。頼朝は両氏の懐柔もはかり、治承４（１１８０）年の１０月に頼朝が武蔵国に入る際には、両氏が最前列で一行を迎え入れました。豊島清元は、その後御家人として文治（ぶんち）５（１１９０）年に奥州藤原氏討伐に従軍しています。東京都北区豊島にある清光寺は、清元が開祖で彼の一人娘の死を悼んで建立されたと伝えられています。

葛西清重に関しては、一度、頼朝に対して強硬な態度を取る江戸重長の誅殺を命じられたこともあります。頼朝が政権を手にした後には、彼の寝床を守る宿直を任されたことからも信頼が厚かったことがうかがえます。

上記のように頼朝は武蔵国の統一には秩父氏の力が必要且つ脅威と考えていて、御家人として起用してからもその力を高く買っていたことが分かります。秩父氏一族は鎌倉幕府の成立・隆盛に大きな影響を及ぼしたと言っても過言ではありません。

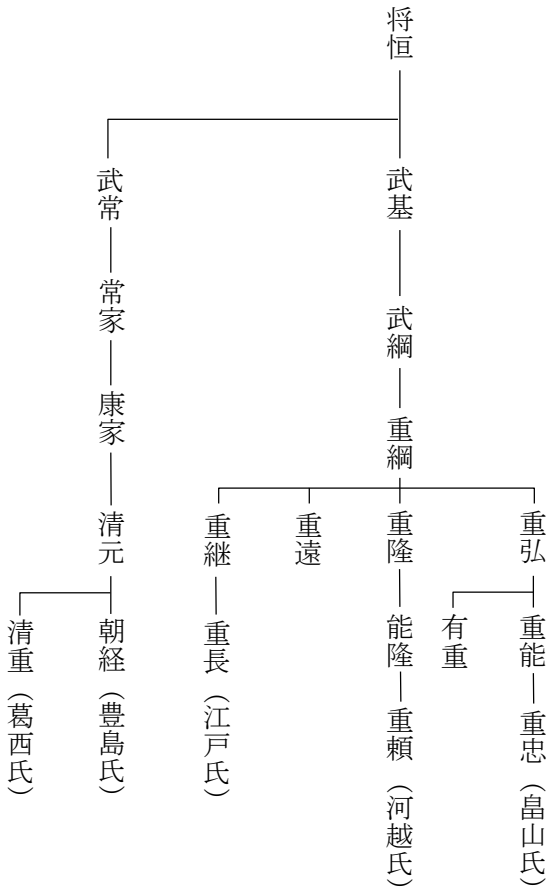

図１　秩父氏家系図

※安田元久 2020「秩父氏系図」を簡略化したものです。

参考文献

埼玉県立歴史資料館編 2006『中世武蔵人物列伝　時代を動かした武士とその周辺』

安田元久 2020『武蔵の武士団その成立と故地を探る』